

初年次教育科目「日本語リテラシー入門」の 実践とその成果

秋山 英治¹⁾, 仲道 雅輝^{2),3)}

- 1) 愛媛大学法文学部人文学科
- 2) 愛媛大学総合情報メディアセンター 兼 教育・学生支援機構教育企画室
- 3) 熊本大学大学院社会文化科学研究科教授システム学専攻

Implementation and Effect of “Introduction to Japanese Literacy” for First Year Course

Eiji AKIYAMA¹⁾, Masaki NAKAMICHI^{2),3)}

- 1) Ehime University, the faculty of law and letters, humanities
- 2) Center for Information Technology and Office for Educational Planning and Research, Ehime University
- 3) Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

1. はじめに

愛媛大学では、平成25年度後学期より、学生の日本語運用能力を向上させるために、共通教育において1年生全学部(約1,900人)必修の授業科目「日本語リテラシー入門」を新設した。

現在、多くの大学で日本人学生を対象とした日本語に関する授業科目が開講されているが、それらの大半は、実習的な学習形態をとるため、少人数クラスを採用している^[1]。当初、「日本語リテラシー入門」においても、1クラス30人から40人程度の少人数クラスを想定していた。しかし、授業科目を新設するにあたって、教員数の大幅な増員が難しい状況にあり、少人数クラスを採用することができないという問題を抱えていた。そこで、ICTを活用した授業やカリキュラムの設計支援を行う教育デザイン室に協力を仰ぎ、授業方法の効率化および改善により授業を再設計することとなった。その結果、限られた教員数で教育の質を落とすことなく、実習的な学びが実施できる授業方法として対面授業とe-learning(愛媛大学では、通称「メディア授業」と呼んでいる。以下、「メディア授業」と称す)^[2]とを組み合わせたブレンディッドラーニングを導入することとなった。本稿では、授業開設の経緯について述べた仲道・秋山・清水(2014)^[1]を踏まえ、実際にどのような授業を行ったのか、その実践および成果について述べる。

2. 教育デザイン室による再設計支援

教育デザイン室による授業の再設計については、仲道・秋山・清水(2014)で詳しく述べているが、ここでその概略を改めて示す。

再設計の手始めとして、授業担当教員に対して、ヒアリングが行われた。授業でどのような活動を実施し、その活動によって何をどこまで到達することを目指すのか、活動要素と到達目標が分析された。活動要素については、ガニエの9教授事象(R. M. Gagné(2007)^[2])を用いて、教授事象と活動内容が細分化された。e-learningを導入するにあたっては、担当教員の不安や負担感により活用が進まない事例が多いことから、そうした不安や負担感を解消するために、対面授業がどの程度必要で、e-learningの導入による教育効果がどの程度望めるかを確認し、対面授業とメディア授業(e-learning)への振り分けが行われた。

次に、開講形態・クラスサイズの分析・設計が行われた。開講形態については、全8回を、対面授業4回、メディア授業(e-learning)4回に振り分け、かつ交互に配置された(図1)。クラスサイズについては、本授業と「社会力入門」科目が同時期間開講であり、また受講者が同一学生であったため、これら2科目の交互開講が可能であった。1セメスターの中で、前半に開講するクラスと、後半に開講するクラスとに分かれ、それぞれ約950人を11人の教員が担当することとなった。前半に開講するクラスとし

回	授業形態	概要
1	対面授業	オリエンテーション 【第1章】文の長さ・句読点・かかり受けを学ぶ 【第2章】単語・文・段落を学ぶ
2	e-learning	【第1章】・【第2章】の振り返り(ポートフォリオ)
3	対面授業	【第3章】ものごとを正しくとらえ、分かりやすく伝える 【第4章】資料を解釈し、説明する
4	e-learning	【第3章】・【第4章】の振り返り(ポートフォリオ)
5	対面授業	【第5章】仮説を立て、考えを組み立てる 【第6章】確かな解釈に基づき、主張する
6	e-learning	【第5章】・【第6章】の振り返り(ポートフォリオ)
7	対面授業	【第7章】主張を検証し、批判する
8	e-learning	【第7章】の振り返り(ポートフォリオ) 最終試験及び全体の振り返り

図1. 授業形態・概要(仲道・秋山・清水 2014)

では、昼間主10クラス・夜間主2クラスの合計12クラス、後半に開講するクラスとしては、合計10クラスで、総計で22クラスとなった。1クラスあたりの人数は、70人程度から110人程度である。クラス間で最大40人程度の差があるが、これは、対面授業およびメディア授業(e-learning)において、グループワークを円滑に行うべく、極力同一の学部・学科(課程)となるよう考慮してクラス編成を行ったためである。

対面授業が万能でないのと同じように、メディア授業(e-learning)も万能ではない。例えば、本実践でのグループワークにおいては、対面授業では、グループごとの進行状況に合わせた指導がタイムリーに行える一方で、授業時間が限られているため、全員がコメントを行ったり、フィードバックを行うことが難しい。メディア授業を活用した場合には、全員に対してコメントやフィードバックが可能になる一方で、フォーラム機能の画面上に言語化された情報以外を汲み取ることが難しい。このような長所と短所をうまくブレンドすることが、ブレンディッドラーニングの成功を左右する。しかし、教員はすべての授業方法に精通しているわけではなく、授業設計の専門家であるインストラクショナル・デザイナーの支援を受けながら、授業を設計していくことが効率的である。授業目標の達成方法には複数あるが、学生のレディネスや意欲などによって効果的な授業方法は異なる。メディア授業(e-learning)においては、いつでも、どこでも取り組める長所がある一方で、学生の自主性に委ねられるところが大きく、周到にデザインされていなければ授業目標の達成が難しい状況となる。

今回の再設計が円滑に進んだのは、開講形態の決定段階から教育デザイン室の支援が得られたことがあげられる。メディア授業(e-learning)を取り入れる際に、教員に対して、個別のかつ具体的な支援を行うことで、教員の時間的負担を軽減し、相談者がいるという安心感を与えることができる。担当教員と教育デザイン室との協働によって、円滑な再設計が行われたと考えられる。

3. 授業実践

3.1. 授業の目的・授業の到達目標

授業の目的および授業の到達目標は、次の通りである。

【授業の目的】

大学生活を送る上で必要な、論理的に思考し判断する力、習得した知識や技能を基に、自分の考えを相手に分かりやすく伝える日本語表現力を身につける。

【授業の到達目標】

- (1) 様々な情報の中から必要な情報を収集・整理することができる。
- (2) 自分の考えを筋道立てて、日本語を用いて適切に表現できる。
- (3) 日本語で書かれた文章や資料を広い視野と論理的思考に基づき分析・解釈することができる。

上記の目的・到達目標に基づき、全8回(うち奇数回は対面授業、偶数回はメディア授業(e-learning))の授業を行った。図1から分かるように、対面授業とメディア授業(e-learning)がワンセットとなっている。

3.2. 授業の概要

教育デザイン室の再設計支援によって、11人の担当教員が合計22クラスの授業を担当することとなったが、クラス数が20クラスを超え、担当教員数も10人以上いることから、授業内容を担当教員の裁量に任せると、クラス間で学習内容の差が生じる可能性がある。そこで、クラス間で学習内容に差が生じることなく、均質な学びを保証するために、オリジナルのテキスト(全7章構成)を作成し、そのテキストに従って、全クラス共通の対面授業・メディア授業(e-learning)を行った^[3]。

各クラスにおいては、TA・SAそれぞれ1人が付き、対面授業・メディア授業(e-learning)ともにサポートした。対面授業においては、TA・SAともに、ペアワーク・グループワークのファシリテーターを担当するなど同じ業務を行うこともあるが、主に以下のように業務を分担し、授業をサポートした。

【TA】

〈対面授業〉

- ①ペアワーク・グループワークのファシリテーター

〈メディア授業〉

- ②課題の採点
- ③学生の問い合わせへの対応

【SA】

〈対面授業〉

- ①授業で使用する資料の準備
 - ②ペアワーク・グループワークのファシリテーター
 - ③提出物の確認・仕分け
- 〈メディア授業〉
- ④課題の取組状況の確認
 - ⑤学生への連絡

3.2.1. 対面授業

対面授業は、テキストを用いて、新しい事項の提示を行った。均質な授業となるよう、指導マニュアル（指導要領・スライド）を作成した。担当教員は、そのマニュアルに従って授業を行うこととなる。

指導マニュアルは、「授業内で語る一言一句が、経過時間とともに活字化されている」（高松正毅（2014）³⁾）わけではない。どの学習活動でどの資料を使用するかなど細かく示した部分もあるが、あくまで授業の流れを示したもので、教員の裁量によって、適宜追加・削除等の変更が可能なマニュアルになっている。

対面授業では、講義のみの単調な授業にならないように、ペアワーク・グループワーク（1グループ6人編成）を導入し、アクティブ・ラーニングに取り組んだ（ただし、第1回対面授業を除く）。具体的な授業の流れとしては、各章（図1参照）ごとに、課題を提示し、その課題にペアあるいはグループで取り組み、その後解説を行い、各章で習得すべきポイント（各章で2ポイント～3ポイントあり、合計で18ポイントになる）を確認するという流れである。第1回対面授業を除く⁴⁾、各対面授業回の課題の概略を示すと、次の通りである。

【第3回】

〈第3章〉ものごとを正しくとらえ、分かりやすく伝える

・図形の説明

図を見て、元の図を見なくても、図が再現できる説明文を書く。

〈第4章〉資料を解釈し、説明する

・表の読み取り

表の特徴を読み取り、その特徴を説明した文章を書く。

【第5回】

〈第5章〉仮説を立て、考えを組み立てる

・数的推理

単純に解けない数的推理問題を、「ゴール・条件・仮説・検証」の4つのプロセスに分け、各プロセスを文章で説明しながら解く。

〈第6章〉確かな解釈に基づき、主張する

・4コマ漫画のセリフ

4コマ漫画の4コマ目のセリフ（オチ）を考え、そのセリフを考えた理由を述べた主張文を書く。

【第7回】

〈第7章〉主張を検証し、批判する

・文章構成の検証と批判

他者の文章の構成（論理展開）をトゥルーミンモデルに基づき検証し、その主張に対する批判文を書く。

課題に対する自らの考えを文章としてまとめ、その後、それぞれの考えを持ち寄り、グループで議論し、よりよい解決策を探っていくという活動である。他者との対話を通して、さまざまな考えを知り、広い視野で思考するよう、ピアワークを重視した。ピアワークによる学習者同士の高め合いについては、対面授業だけでなく、次に述べるメディア授業（e-learning）においても重視している。

3.2.2. メディア授業（e-learning）

メディア授業（e-learning）は、対面授業で学習した内容の振り返りを行った。10日間程度の受講期間を設け、すべての課題をMoodle上で取り組んだ。メディア授業（e-learning）の受講条件として、各回すべての課題に取り組むことを課した。各メディア授業回の課題の概要を示すと、次の通りである。

【第2回】

①前提テストの受験⁵⁾

日本語リテラシー入門を受講するにあたって、自分自身の日本語力を測定するための前提テストの受験
※現在、どの程度の日本語力があるかを確認するためのものであることから、テストの結果は成績判定には関与しない。

②前提テストに関するアンケートの回答

上記①の前提テストに関するアンケートの回答

※アンケートの回答は必須であるが、アンケートの回答内容（結果）は成績判定には関与しない。

③解説動画の視聴

対面授業で学んだ内容を解説した動画の視聴

※解説動画は、各章1本。1本あたりの時間は、10分程度。

④確認問題の解答

対面授業で学んだ事項に関する確認問題（正誤問題）の解答

※80%以上の得点で合格。不合格の場合は、合格するまで繰り返し解答する。

⑤授業の振り返り（ポートフォリオ）の作成

第1回対面授業・第2回メディア授業（e-learning）を受講して学んだことに対する振り返り

【第4回・第6回】

①解説動画の視聴

対面授業で学んだ内容を解説した動画の視聴

※解説動画は、各章1本。1本あたりの時間は、10分程度。

②確認問題の解答

対面授業で学んだ事項に関する確認問題の解答

※ミニレポートを作成し、グループ（対面授業と同じグループ）の学生（全員）が書いたミニレポートに対してコメントする。

③授業の振り返り（ポートフォリオ）の作成

第3回対面授業・第4回メディア授業（e-learning）

第5回対面授業・第6回メディア授業（e-learning）

を受講して学んだことに対する振り返り

【第8回】

①解説動画の視聴

対面授業で学んだ内容を解説した動画の視聴

※解説動画は、1本。1本あたりの時間は、10分程度。

②確認問題の解答

対面授業で学んだ事項に関する確認問題の解答

※ミニレポートを作成し、グループ（対面授業と同じグループ）の学生（全員）が書いたミニレポートに対してコメントする。

③授業の振り返り（ポートフォリオ）の作成

第7回対面授業・第8回メディア授業（e-learning）

を受講して学んだことに対する振り返り

④最終試験の受験

1) 最終レポートの作成

2) 第1回から第8回まで授業全体の振り返り（ポートフォリオ）の作成

3) 授業評価アンケートの回答

メディア授業（e-learning）は、すべての回で、「解説動画の視聴」「確認問題の解答」「授業の振り返り（ポートフォリオ）の作成」の3つの課題（基本課題）がある。第2回メディア授業（e-learning）では、基本課題に加えて、授業受講開始時点での日本語力を学生に把握させるための「前提テスト」および「前提テストに関するアンケート」がある。第8回メディア授業（e-learning）では、基本課題に加えて、「最終試験」（最終レポートの作成・授業全体の振り返り（ポートフォリオ）の作成・授業評価アンケートの回答）がある。

「確認問題」は、第2回メディア授業（e-learning）のみ正誤問題である。他の回では、課されたテーマに関して、対面授業で学んだことを踏まえてミニレポートを作成し、グループの学生が書いたレポートを読みコメントすることを課した。

メディア授業（e-learning）で特に重視したのは、実習的な学習をインタラクティブに行うということである。宮

地他（2009）⁴⁾が指摘するように、e-learningは暗記・反復練習といった学習（1人での学習）に向いているため、単調な学習になりやすく、学習者のモチベーションを維持させるのが難しい⁶⁾。そこで、本授業では、Moodleのフォーラム（ディスカッション）機能を活用し、ミニレポートを書くとともに、グループの学生が書いたミニレポートに対してコメントを書く（他者を評価する）ことを課した。画面上ではあるが、対面授業と同様に、学生同士の意見交換（ディスカッション）を行わせたのである（Moodle上では、自分たちグループの取組（ディスカッション）だけでなく、同じクラスのすべてのグループの取組（ディスカッション）が閲覧できる設定となっている）。メディア授業（e-learning）においても、対面授業と同様に、グループ内でコメントし合うというピアワークによって学習者同士の高め合いを促進させようとしたのである。

このような学習活動には、次の(1)~(3)の教育的効果が期待できる。

- (1) 1人で黙々と単調な学習に終始するのではなく、学生同士がやりとりをするインタラクティブな学習を行うことで、学習者のモチベーションが維持できる。
- (2) 他の学生の多様な意見や考えを知ることで、幅広い視野で思考する力を育成することができる。
- (3) 自分が書いたミニレポートやコメントが他者に見られることを意識させることで、他者に正確に伝わる表現力を育成するとともに、他者に配慮する表現力（態度）を養うことができる。

これらの教育的効果については、「最終試験」として行った授業評価アンケートの自由筆記において、次のようなコメントがあったことから確認することができる。

- ・自分の書いたことに対して同じグループの人から返信が返ってくることで自分の気づかなかった問題点がしっかり分かり、同時に過去の自分が取り組んだことも見直せるのでメディア授業は良かった。
- ・Moodleでディスカッションをする授業は初めてだったので新鮮だった。このように他人の文章を読んだり、他人に自分の文章を読んでもらってアドバイスをもらったりできるのは良いと思う。
- ・新たな形式で最初は戸惑いもあったが、他人の意見を見てコメントする機会などは普段はあまり持たないため、有意義だった。

グループの学生へのコメント内容については、当初学生の自由な発言を尊重するため、特に指定していなかったが、ステレオタイプのコメントしか書かない学生や最低限のコメントしか書かない学生がいるなどの問題があったこ

とから、授業実施中に変更し、「良い点2つ、改善点1つ」を書くように条件設定した。しかし、「良い点が（1つは見つかるが）2つも見つからない」「良く書けたミニレポートに対しても改善点を書くのが難しい」という声が出るなど、コメント内容に条件を設定したために新たな問題が生じることとなった。また、平成25年度は、グループの学生全員（1グループ6人編成のため5人）にコメントするという条件を課したが、この条件を満たすには、メディア授業（e-learning）の締切間際までMoodleを見ておかなければならない場合があり、学生生活に支障が生じる（いつでもどこでも受講できるというメディア授業（e-learning）の利点と相反する）という問題もあった。これらの問題を解消するために、平成26年度は、コメント対象の人数をグループ全員から2人に減らし、コメント内容も「良い点1つ、改善点（アドバイス）もしくは感想を1つ」へ変更した。

4. 授業の成果

授業の最終回となる第8回メディア授業（e-learning）において、「最終試験」として行った授業評価アンケートをもとに、本授業の成果を検証したい。

次に示すデータは、前半開講クラスと後半開講クラスを合わせた全体のデータである^[7]。授業評価アンケートでは、選択式・記述式合わせて約40項目について調査しているが、それらの中で特徴的な結果を示している項目をあげることにする。

4.1. 受講前の意識について

授業を受講する前に、学生がどの程度、本授業に関心があったかを知るために、受講前の意識について尋ねた（単一回答）。その結果を示すと、図2のようになる。



図2. 受講前の意識

図2を見ると、「①とても関心があった」と「②ある程度関心があった」を合わせた「関心がある」という回答の比率は47%で、受講前に本授業に関心があったという学生が、半数に満たない。一方、「④あまり関心なかった」と

「⑤全く関心なかった」を合わせた「関心がない」という回答の比率は28%で、4人に1人以上の割合で、本授業に関心を示していない。受講前の意識としては、それほど関心が高いわけではないことが分かる。

4.2. 授業に取り組む姿勢について

学生は授業を受講するにあたって、授業に対してどのように取り組んだかを知るために、授業に取り組む姿勢について尋ねた（単一回答）。その結果を示すと、図3のようになる。

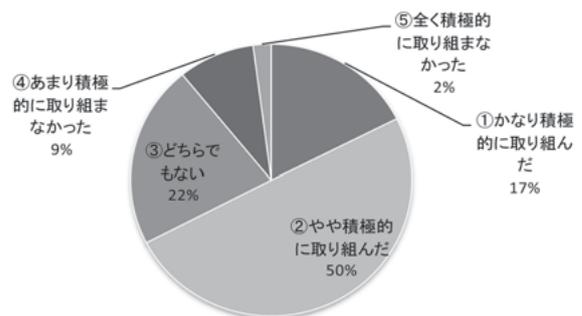


図3. 授業に取り組む姿勢

図3を見ると、「①かなり積極的に取り組んだ」と「②やや積極的に取り組んだ」を合わせた「積極的に取り組んだ」という回答の比率は67%で、7割近い学生が授業に積極的に取り組んでいる。「③どちらでもない」という回答の比率が22%あるものの、「④あまり積極的に取り組まなかった」「⑤全く積極的に取り組まなかった」を合わせた「積極的に取り組まなかった」という回答の比率は11%であることから、多くの学生が授業に積極的に取り組んでいることが分かる。

4.3. 日本語表現に対する意識について

本授業を受講することで、日本語表現に対する意識にどのような変化が起きたのかを知るために、受講後の日本語表現に対する意識について尋ねた（単一回答）。その結果を示すと、図4のようになる。

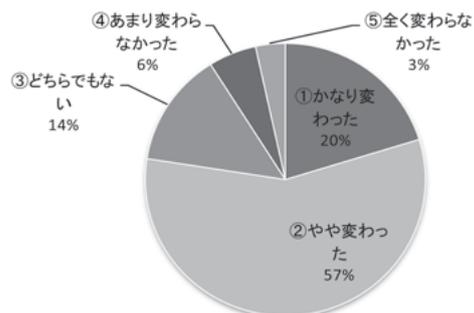


図4. 受講後の日本語表現に対する意識

図4を見ると、「①かなり変わった」と「②やや変わった」を合わせた「変わった」という回答の比率は77%で、8割近い学生が、日本語表現に対する意識が変化していることが分かる。

受講前の意識としては、本授業にそれほど関心がなくても、実際に授業を受講することで、積極的に取り組むようになり、さらに日本語表現について意識するようになるという意識の変化が見られる。本授業の受講が、学生の意識により刺激を与えているということであろう。

4.4. メディア授業 (e-learning) の良い点について

本授業は、愛媛大学で初めてメディア授業 (e-learning) を導入した授業である。そのメディア授業 (e-learning) にどのような良さがあったかを知るために、メディア授業 (e-learning) の良い点について尋ねた (複数回答可)。その結果を示すと、図5のようになる。

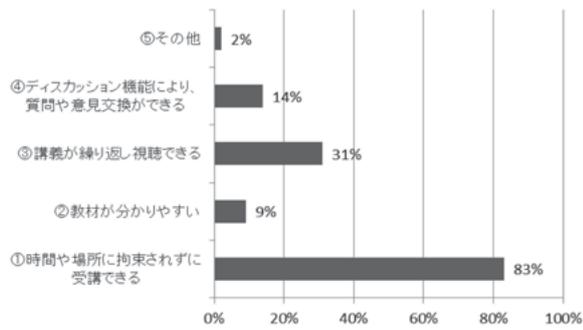


図5. メディア授業 (e-learning) の良い点

図5を見ると、「①時間や場所に拘束されずに受講できる」という回答の比率が83%で最も高い。メディア授業 (e-learning) の一番の特徴である「いつでも」「どこでも」受講できるという点を学生も良いと意識している。

学生が、主にどこでメディア授業 (e-learning) を受講したのかについて尋ねた (単一回答) 結果 (図6) を見ると、「③自宅」という回答の比率が85%で最も高い。「①大学の演習室」と「②大学の演習室以外の場所」を合わせた「大学」という回答の比率が15%であることから、学生の多くは、大学の授業後に自宅を受講していることが分かる。自分の好きな時間・場所で受講しているのである。

また、図5を見ると、「③講義が繰り返し視聴できる」という回答の比率が31%と、3人に1人の割合で、「何度でも」受講できるという点に良さを感じている。メディア授業 (e-learning) の良さとして、学生は、第一に「いつでも」「どこでも」受講できること、そしてその次に「何度でも」受講できることを実感している。授業評価アンケートの自由筆記においても、次のようなコメントがあり、受講者の取組の促進に寄与したことが分かる。

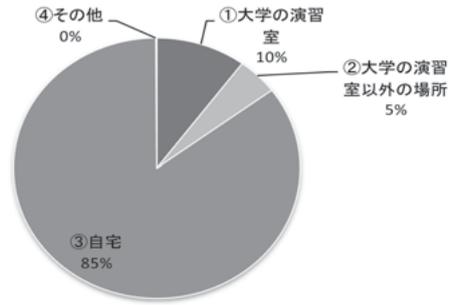


図6. メディア授業 (e-learning) の主な受講場所

- ・メディア授業があることによって、納得いくまで復習できたので良かった。
- ・メディア授業は、自分のペースで理解しながら、復習もかねつつできたので、とても良かった。
- ・メディア授業という新しい受講方法によって、対面授業と比べて自分のペースでしっかりと課題に取り組むことができた。課題の提出も自宅からインターネットを通じて送信することが可能であるので、非常に便利であった。
- ・メディア授業の受講期間も短すぎず、空き時間などに小分けにしてやることもできたので、かなり効率よく受講することができた。また、普段何気なく使っていた日本語の使い方を改めて習うことで、より論理的な思考を身に付けることができた。

4.5. 授業形態について

本授業では、対面授業とメディア授業 (e-learning) とを組み合わせたブレンディッドラーニングを導入したが、このような授業形態が学生に有益であったかを知るために、「通常の対面授業と比べて、ブレンディッドラーニングが良かったか」について尋ねた (単一回答)。その結果を示すと、図7のようになる。

図7を見ると、「①とても良かった」と「②やや良かった」を合わせた「良かった」という回答の比率は58%で、6割近くの学生が、通常の対面授業よりも、ブレンディッド

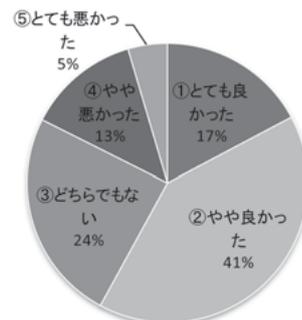


図7. 授業形態

ラーニングが良かったと意識している。授業評価アンケートの自由筆記においても、「対面授業とメディア授業を併用することで、理解度が増し、とても良いシステムだと思った」「対面授業で学んだことを、メディア授業で復習も兼ねながらさらに理解を深めていくことができた」などのコメントがあり、ブレンディッドラーニングによって、受講内容の理解度をより深化させることができたようである。教育デザイン室の支援によって、対面授業・メディア授業(e-learning)それぞれの良さを活かした(バランスよく配置した)授業の再設計を行った成果が現れていると考えられる。

対面授業よりも、ブレンディッドラーニングの方に良さを感じる学生が多いという上記の結果は、本授業を含め、他の授業において、今後どのような授業形態を採用していくかを考える上で示唆的な結果であると言える。

4.6. 授業の到達目標に対する自己評価について

授業を受講することによって、どの程度到達目標に達したのかを知るために、3.1.で示した到達目標(1)~(3)に対する自己評価を10点満点で尋ねた(単一回答)。その結果を示すと、図8~図10のようになる。

図8~図10を見ると、到達目標(1)の平均点が7.8点、到達目標(2)の平均点が7.6点、到達目標(3)の平均

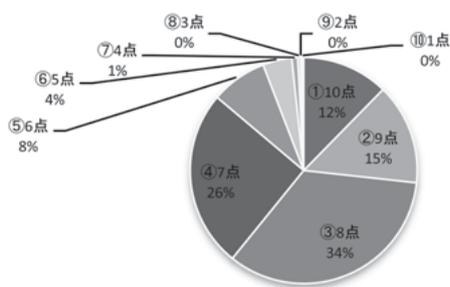


図8. 到達目標(1)

様々な情報の中から必要な情報を収集・整理することができる。

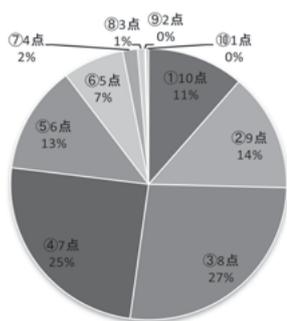


図9. 到達目標(2)

自分の考えを筋道立てて、日本語を用いて適切に表現できる。

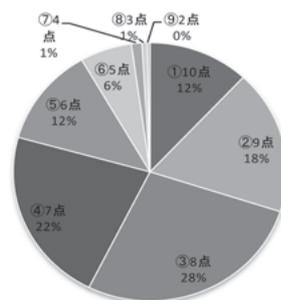


図10. 到達目標(3)

日本語で書かれた文章や資料を広い視野と論理的思考に基づき分析・解釈することができる。

点が7.5点、到達目標(1)から(3)の3つの目標を合わせた平均点が7.6点である。到達目標による差はなく、すべての到達目標において、7.5点以上の高い得点(自己評価)となっている。本授業を受講することによって、学生は一定程度の自己肯定感を得ていると思量される。

以上、授業評価アンケートをもとに、本授業の成果を見てきたが、それらをまとめると、次のようになる。

- ① 授業に対して関心のある学生は、受講前は半数以下であるが、授業を受講することによって、約7割の学生が積極的に取り組むようになる。また、授業を受講することによって、約8割の学生が日本語表現を意識するようになる。本授業の受講は、学生により刺激を与えている。
- ② メディア授業(e-learning)の良い点として、8割以上の学生が時間や場所や拘束されずに受講できる点をあげている。主な受講場所としては、自宅が最も多く、8割を超えている。また、3割の学生は、メディア授業(e-learning)の良い点として、「何度でも」受講できることをあげている。学生は、「いつでも」「どこでも」、そして「何度でも」受講できる点にメディア授業(e-learning)の良さを実感し、肯定的に捉えている。
- ③ 対面授業とメディア授業(e-learning)を組み合わせたブレンディッドラーニングに対して、約6割の学生が、対面授業よりも良い授業形態であると肯定的に捉えている。
- ④ 授業目標として掲げた3つの目標を合わせた自己評価の平均点は、10点満点中7.6点で、本授業を受講することによって、一定程度の自己肯定感を得ている。

5. おわりに

平成25年度に開講した「日本語リテラシー入門」について、授業実践および成果について見てきた。愛媛大学で初めてメディア授業(e-learning)を導入した本授業は、4.で述べたように、一定程度の教育効果を得ており、所期の

目的を果たしたと言えよう。授業評価アンケートの自由記述の中にも、「後学期の授業ということで、大学の授業にどこか慣れているところがあったが、これまでに受けたことのない斬新な授業だったので、新鮮な気持ちで受けることができた」といった意見が複数見られ、本授業を学生が肯定的に捉えていることが分かる。

しかし、その一方で、「PCの操作に慣れていないので、メディア授業(e-learning)が大変だった」といった否定的な意見も見られた。前半に開講したクラスでの実践を踏まえ、後半に開講したクラスでは、より見やすいMoodle画面へと修正し、学生からの問い合わせ件数や、取組の不備は大幅に減少したが、それでもPCに習熟していない学生にとっては、取り組みにくいところがあったようである^[8]。授業開設当初より、Moodleの操作で困った時に確認できる「Q&A」を設けていたが、さらにその内容を充実するなどして、PCに習熟していない学生もスムーズに取り組めるよう改善する必要がある。

また、平成25年度は本授業が開設した初年度ということもあり、TA・SAの業務内容・量が当初の見込みよりも多く、負担が重くなってしまったという問題点もあった。

今後は、このような問題点を解消するとともに、本授業の成果を、学生による授業評価アンケートだけでなく、多角的に検証し、よりよい授業となるよう改善していきたいと考えている。

注

[1] 清水・秋山(2010)^[9]によれば、日本語リテラシー教育を行っている大学では、レポート作成や論文作成など実習形式の学習が中心であることが述べられている。

愛媛大学法文学部人文学科では、1997年より専門科目として、より高度で専門的な日本語運用能力を向上させるための授業科目「日本語表現」を実施しているが、1クラスあたりの人数は30~40人程度の少人数クラスを採用している。

[2] 「メディア授業」とは、「多様なメディアを高度に利用して行う授業」の略称である。

本授業は、愛媛大学において初めて「メディア授業」を導入した授業であるが、導入にあたって、大学設置基準に基づくメディア授業の取り扱いに関する学内規定を整備し、運用のためのガイドラインが作成された。その学内規定に沿ってe-learningを行う授業を、通称「メディア授業」と呼んでいる。

[3] クラス間で学習内容に差が生じることなく、均質な学びを保証するために、平成25年度は全クラス共通の対面授業・メディア授業(e-learning)を行ったが、学部・学科別、あるいは日本語別別に学習内容・課題を変えていくことも考えられる。ただし、教育的効果、円滑な授業運営など種々の面での検討が必要であることから、この点については、今後の課題としたい。

[4] 第1回対面授業では、はじめにオリエンテーションとして、本授業の目的や到達目標など授業全体についての説明、

メディア授業(e-learning)の受講方法についての説明を行い、その後第1章「文の長さ・句読点・かかり受けを学ぶ」、第2章「単語・文・段落を学ぶ」の内容を学んでいく。

[5] 前提テストは、文部科学省・大学間連携共同教育推進事業「学士力養成のための共通基盤システムを活用した主体的学びの促進」(代表校：千歳科学技術大学)において、日本語WGで作成された「プレイズメントテスト」を使用した。

[6] 宮地他(2009)^[4]では、学習活動を、反復や暗記によって習得し、客観テストを用いて正誤の評価が容易に下せる(正解が容易に予測できる)「eラーニングに向いている」「Referential活動」と、単に反復や暗記では習得できない、客観テストを用いて正誤の評価が容易ではない(正解が容易に予測できない)「集合学習に向いている」「Display活動」との2つに分けている。この宮地他(2009)の分け方に対して、篠崎大司(2013)^[6]は、宮地(2009)の「Referential活動」を「教師による学習支援」と「学習者同士による共働学習」とに分け、前者を「アウトプット系」、後者を「インタラクティブ系」と呼び、さらに宮地他(2009)の「Display活動」を「インプット系」と呼び、3つに分けている。

[7] 本稿では、紙面の都合上、全体の結果のみを示したが、学生の属性別に分析すると、文系学生と理系学生とで結果が異なる部分が見られる。その一部については、日本リメディア教育学会第10回全国大会(2014年8月22日、東京電機大学)において発表した(秋山・仲道(2014)^[7])。詳細については、別稿に譲ることとする。

[8] メディア授業(e-learning)については、学生も初めて行う活動であるために不慣れな部分があり、各メディア授業(e-learning)回において取組に不備のある学生が確認された。これらの学生については、受講期間の延長を行うなどしてサポートした。

附 記

本研究は、平成24・25年度愛媛大学教育改革促進事業(愛大GP)「日本語リテラシー教育実践における授業システムの構築」(研究代表者：秋山英治)の助成を得て行ったものである。

本稿は、大学eラーニング協議会・大学間連携共同教育推進事業 合同フォーラム2013(2014年3月6日、佐賀大学)、大学教育学会第36回大会(2014年6月1日、名古屋大学)での発表をまとめたものである。

引用文献

- 1) 仲道雅輝・秋山英治・清水史(2014),「インストラクショナル・デザイン(ID/教育設計)を活用した対面授業からブレンディッドラーニングへの再設計支援」,『大学教育実践ジャーナル』(愛媛大学教育企画室)12, pp.47-54
- 2) R. M. Gagné, W. W. Wager, K. C. Golas, J. M. Keller 著(鈴木克明, 岩崎信: 監訳)(2007),『インストラクショナルデザインの原理』, 北大路書房
- 3) 高松正毅(2014),「新設科目「日本語リテラシー」の概要 - 高崎経済大学経済学部における初年次教育の試み -」,『日本リメディア教育学会第10回全国大会予稿集』, pp.30-31
- 4) 宮地功・安達一寿・内田実・片瀬拓弥・川場隆・高岡詠

- 子・立田ルミ・成瀬喜則・原島秀人・藤代昇丈・藤本義博・山本洋雄・吉田幸二(2009),『eラーニングからブレンディッドラーニングへ』, 共立出版
- 5) 清水史・秋山英治 (2010), 「高等教育における日本語リテラシー教育の現状と課題」, 『愛媛大学法文学部論叢人文科学編』 28, pp. 83-116
- 6) 篠崎大司 (2013), 「日本語上級文法 eラーニングコンテンツの開発-ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて-」, 『漢字・日本語教育研究』 2 (日本漢字能力検定協会), pp. 62-75
- 7) 秋山英治・仲道雅輝 (2014), 「初年次教育におけるブレンド型授業の実践とその成果」, 『日本リメディアル教育学会第10回全国大会予稿集』, pp. 118-119